

〈特別寄稿〉

# 学問における主体性

服部四郎博士の立言

一

服部四郎博士の学問的見識と気魄を尊敬していたわたくしは、先年、服部さんを主賓として迎えて学問論に関する小規模の座談会を開いたことがある。

戦後まもなく、安部能成、武者小路実篤などの諸大家が発起人となって生成会という文化団体が組織され、『心』という機関誌を刊行されたことがある。わたくしは文字どおり、この会の末席に会員として名を連ねていた関係もあり、この会の主宰者から、学問論についての座談会を開くように依頼を受けた。そこでまず、服部さんに主賓として参加していただき、また、故・松浪信三郎、今道友信の両氏の参加を得て、『学問における主体性』という題の座談会を開いた。その内容は、

『心』昭和四十八年八月号、四〇―六二ページに公刊されている。

ここで発表された服部さんの御意見は非常に貴重なものであると思うが、一般学界には知られていないようであるから、その若干部分をご紹介しますことを、お恕しいただきたい。

二

服部 明治以来日本は西洋の学問に追いつく必要があったもんで、大変努力して来たと思うんですが、それで翻訳だとか翻案だとかいう事が必要であったし、盛んに行なわれて来て、今でもそういう事が盛んであるわけですけども、確かにそれが必要な事で特に古典的なもの、一流のもの、正確な翻訳と申しますか、これはぜひ必要な事ですね。しかし翻訳にも色々あって、極めて大雑把

中村 元

な翻訳もありますし、厳密と称して単語を単語に置き換えて、日本語にはならないような翻訳もある。

**服部** それから何かある単語の訳語として一つの単語に決めたら、日本語としては意味が通らなくてもその単語ばかり使う。しかしこういうやり方に二通りあるんじゃないでしょうか。原文の意味が分かっているやうな人と、分からないからただ言葉を機械的に置き換える人と、私も以前にこんな事を聞いた事があります。翻訳は非常に易しい事だ、言葉を置き換えていけばいいんだからと、これはとんでもない事で、翻訳こそ難しい。原著者の思想がすっかり分かってからでなければ出来ないのに、言葉を置き換えればいいと原文の意味が分らないでどんどん書いている翻訳がありますね。そういうのは読んで分りませんね。それからもう一つは、原文の意味は分っているのだけれども、日本語として無理をなされるわけですね。そういうようなのはちょっと読むと分らないやうだけれども、何回もよく読んで全体を見ていくと、段々分って来るといふやうな事もあります。要するに原書の意味が分らなければ翻訳は出来ないわけでしょう。だから一番いい翻訳といふのは、よく分った上でそれを日本語として通る文章にする事です。今道さんのアリストテレスの『詩学』のやうなもの、ああいうのは模範的ですが、それで翻訳だとはっきり言って、また自分の考えを注釈として付け加えていくとか、原文批判があればそれををはっきりやるべきだと思ふんです。そういう翻訳が重要な文

献について出来るのは、日本が後れているとかいいないとかと関係なしに、いつまで経っても必要な事だと思ふのですけれども、特にこの百年來翻訳が日本で必要だったものですから、訳書がおびただしく出たために、実際には翻訳であるものが、そうだと銘打ってなかったり、場合によると全くの訳なのに著だとなつていたり……

**服部** チョイムスキーの Syntactic Structures という本が一九五七年に出た時に、ちっげけな本で後に学界に大變な影響を及ぼすという事は誰も知らなかった。それを簡単にこういう本が出たと紹介する。それに似たやうな事ですね。要するに本を早く買ったというだけで、それが一つのメリットになるのが間違つてはいはないかと思ふんです。

〔学問研究者に主体性がない〕

**服部** 自分で判断するという心構えが足りないと思ふんです。本当にその本の内容が分り、その価値が分っている者が翻訳しなければいけないのに、ただ言葉を日本語に置き換えるだけで翻訳をやるといふ事が、学問に対してどういふ貢献になるのかという疑問を抱くんです。

**服部** これは諸先生に教えて戴かなければならない事ですが、人間といふのは各々顔が違うやうに脳髓の構造も少しずつ違つてゐるに違いないので、結果的に自分の頭で考えれば、独創といふのは出そうと思わなくても、必ず独創があるはずですね。それと、

やっぱり徹底的に自分の頭で考えて納得出来なければ学問にならない。われわれの脳髓は大変な構造を持った素晴らしいもので、徹底的に考えれば何かの体系が出来て来るようなものになって、いるんじゃないかという気がしますね。それを忘れて自信がなくて、向こうのものを追いかけて、自分で徹底的に考えない。人の言葉だけを分らないで口で繰り返すだけで、何もこなれていないから学問にならないんじゃないでしょうか。そういう感じもするんですが。

〔学問の敵は邪念〕(一)の中の文句は、『心』編集者の挿入

服部 他の人の貢献出来ない事が、何か出来て来るんじゃないかと思うんです。それは勿論自分だけで考えておつたんでは駄目なんで、色んな先輩の知恵を沢山学べば学ぶほど結構ですけれども、ただそれを猿真似みたいに言葉を暗誦しているんじゃない駄目で、自分の体験にぶつけて豊かにしていけば、本当の学問が当然出て来るんじゃないか。それからもうひとつの学問の敵は、一種の邪念みたいなもの——自分は沢山本を読んでいるとか、学のあるところを見せようとか。それが出て来たら、これはもうお話にならないと思うんです。そうして結局自分自身のコスモスというか、最も大切なものを見失ってしまうんじゃないでしょうか。あの人は能力がない、この人は能力があるという事じゃなくて、邪念のために自分自身の学問が確立しないのではないか。

服部 独創的になろうと思つたらまた間違いで、自分が納得いく

まで考えるというか科学であれば事実を観察して確かめ、その上で仮説を立てるわけですが、自分が納得出来るようなやり方でやればいいの……

### 三

服部博士の立言は、まだ他の言語に関する諸事項にも及んで、それが、それらは省略させていた。思想研究の分野から、わたくしなりに特に重要なことからは、特殊な事項も、広い視野の中から位置づけて評価するつもりで言つたらよいであろう。

先年、或る言語学者との対談において、言語学の原理の確立のために、言語を学習することは多ければ多いほど良い、と発言されたことがある。比較して、原理的なもの、普遍的なものを取り出すためには、比較の材料は、異質的であるほど好都合であり、また多ければ多いほど良いはずである。

この点で、服部さんは、日本の哲学教授たち、または(哲学学者たち)——「哲学者ではない！」が、「フランス哲学を研究する」とか、「あの人はドイツ哲学を研究している」とかいう評言を公言していることを嘲笑しておられた。このように対象を限定してしまつたら、もはや「哲学」ではないというのである。わたくしは服部さんに力づけられて、『インド哲学なるものは有り得ない』という発言」という論文(財団法人東方研究会刊行『東方』第8号、

一九九二年、五一—〇頁)を書いて発表したことがある。

さらにわたくしは、先年（昭和五九年二月）日本学士院の会員に任せられたとき、専攻学科目を書き出さねばならぬときに、わたくしは単に「インド哲学」とだけ書くかと思っていたところが、服部さんが特に電話を下さり、さらに「比較思想」を付加せよ、と勧められた。その理由は、今ここでこのように書き出せば、将来の学問の発展のために何か好都合なことがあるかもしれない、と言われたのである。会員のうちには専門を二つ書き出しておられる方々も幾人もおられる。英語で表現すると非常に簡単である。ただ、

“Indian and Comparative Philosophy”

と表現されるだけである。海を越えてアメリカやカナダでは、東洋哲学なるものは、全部 ‘comparative philosophy’ のなかに含まれてしまう。わたくしは服部さんの勧めに従ったが、今はどこから文句を言ってくる来ない。

服部さんの憶い出は、余りにも豊かで、強烈であるが、将来の学問の発展のために、その一端を述べさせていだいた。

（なかむら・はじめ、インド哲学・比較思想、

比較思想学会名誉会長）